

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：32608

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K18267

研究課題名（和文）在米インドシナ難民による難民体験の語りと記憶に関する研究

研究課題名（英文）Research on Indochinese Refugees' Narratives and Memories of Their Experiences in the U.S.

研究代表者

佐原 彩子（Sahara, Ayako）

共立女子大学・国際学部・准教授

研究者番号：70708528

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：ベトナム難民をその中心としたインドシナ難民がどのように彼ら自身の体験を記憶・記録してきたのかについて、彼らのオーラル・ヒストリーや再定住の背景に関わる史料を分析した結果、インドシナ難民の人々の多くは難民キャンプを通じて英語教育および職業斡旋を受け、受け入れ先のコミュニティで生活を開始させるという経験をしていた。そうした体験を通して、多くの人びとは下方可動性に対峙し、生活を再建するなかで個々の戦争・移動にまつわる記憶を形成してきたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「インドシナ難民は『難民体験』をどのように語り、記憶してきたのか、そしてその記憶がアメリカ社会について何を表しているのか」という学術的問いのもと、救済の客体として捉えられてきた難民の主体性を問い直し、ベトナム難民をその中心としたインドシナ難民がどのように彼ら自身の体験を記憶・記録してきたのかについて分析し、移民・難民研究の系譜において新たな事例を提供した。

研究成果の概要（英文）：The study analyzed the oral histories and resettlement backgrounds of the Indochina refugees, mainly Vietnamese refugees, to understand how they remembered and recorded their own experiences. They resettled in the United States, through English education and job training in their host community. Through these experiences, refugees were forced to confront downward mobility, and many have formed individual memories of war and migration as they rebuilt their lives.

研究分野：アメリカ研究

キーワード：アメリカ合衆国 難民 ベトナム

1. 研究開始当初の背景

ドナルド・トランプは大統領選挙中から反難民言説を加速させ、2017年の大統領就任後すぐに難民受け入れを大幅に縮小する大統領令および次年度の難民受け入れ数を発表した。難民排斥は2001年以降の対テロ戦争開始によってアメリカに広く受け入れられてきたムスリム排斥の一部として理解することができたものの、アメリカ合衆国(以下アメリカ)が第三定住国として難民受け入れに積極的であり、とくにベトナム戦争終結から80年代前半をピークとして多くのインドシナ難民をはじめとして多くの難民を受け入れてきたことと矛盾していた。

そのため、難民研究そのものに批判的に取り組もうとする学術的関心が高まり、カリフォルニア大学の Critical Refugee Studies Collective (批判的難民研究共同体)は、難民を単なる研究対象としてではなく、難民を通して社会や文化を考察するという難民研究そのものの可能性を広げる試みに取り組んでいた。ベトナム戦争終結以降40年以上が経過し、旧インドシナ三国出身の難民による語りおよびその表象は、しばしばベトナム戦争におけるアメリカの敗北の記憶を矮小化し、戦争そのものが絶対的悪ではなく、ある程度は正しい戦争であったかのような政治的言説を成立させてきたとの指摘もあった(Yen Le Espiritu)。アメリカ社会へのインドシナ難民受け入れは、反共主義を標榜した旧南ベトナムを中心とする人々を受け入れることでもあり、アメリカの「道義的責任」を果たすものであると、フォード政権やカーター政権はしばしば強調した。この点においてインドシナ難民受け入れは、アメリカ社会におけるベトナム戦争の記憶を歪めてきたともいえる。そのため、難民の体験や記憶を批判的に考察する必要性が主張されてきたが、批判的難民研究の視座から難民体験を歴史的に捉え直そうとする研究はまだ少なかった。とくに、そのなかでもエゴドキュメントとしての難民の語りの可能性を分析すること、そして非政府組織と難民のやりとりから再定住過程で難民が直面せざるを得なかった問題を考察することを試みる必要があった。

2. 研究の目的

本研究は、難民による語りが惹起する「共感」がアメリカ主流社会のベトナム戦争敗戦の記憶を忘却させる役割を果たしてきたことも意識しつつ、難民の語りとアメリカ主流社会の関係、難民の体験そのものが示すアメリカ社会の問題点、そしてそれらが照らし出す冷戦政治の特徴について考察することを目的とした。インドシナ難民の人々の多くは難民キャンプを通じて英語教育および職業斡旋を受け、受け入れ先のコミュニティで生活を開始させた。このような体験を通して難民は、下方可動性(downward mobility)に対峙せざるをえなかった。難民の人々はその変化をどのように記憶・記録してきたのか、そして、その体験はアメリカ社会による「救済」であったのかについて分析する。それによって、アメリカが難民政策を通して掲げた人道主義とは何だったのかについても新たな視野を提供する。

3. 研究の方法

本研究は、「インドシナ難民は『難民体験』をどのように語り、記憶してきたのか、そしてその記憶がアメリカ社会について何を表しているのか」という学術的問いのもと、救済の客体として捉えられてきた難民の主体性を問い直し、ベトナム難民をその中心としたインドシナ難民がどのように彼ら自身の体験を記憶・記録してきたのかについて、彼らのオーラル・ヒストリーや彼らの手紙などの史料を分析した。本研究では、インドシナ難民が「難民体験」をどのように語り記憶してきたのかについて、カリフォルニア大学アーバイン校(アメリカ、カリフォルニア州アーバイン)において収集されている元難民あるいは難民であった家族をもつ人々によるベトナム系を中心とした「ベトナム系アメリカ・オーラル・ヒストリー・プロジェクト」(Vietnamese American Oral History Project: VAOHP)に収集されているインタビューなど、また、Southeast Asian Archivesで収集されている史料を調査し、彼らの記憶や経験を歴史的観点から考察した。とくに州政府関係者が寄贈した、初期のカリフォルニア州での難民定住に関する史料を入手し、史料分析を行った。

4. 研究成果

まず、ベトナム難民に関してその受け入れ状況および歴史的背景についてについて明らかにし、その中で難民となった人びとが、その状況をどのように生きたのかについて考察した。多くの場合、再定住の過程において、支援者と支援される側のなかで、前者が期待していたことと後者の期待していたことの間で齟齬があったことがわかった。

2019年3月に実施した、アメリカ・カリフォルニア州でのカリフォルニア大学アーバイン校のSoutheast Asian Archivesでの史料調査によって、1970年代から現在に至るカリフォルニア州オレンジ郡を中心とした難民流入に関して新しい知見を得た。連邦政府レベルではなくカリフォルニア州レベルでの福祉援助のあり方や、カリフォルニア州に流入してきた難民たち自身が州政府と協力しながら、さまざまな援助プログラムが実行されていったことが明らかになった。そこから、カリフォルニア州にベトナム難民のコミュニティである「リトルサイゴン」がい

くつか形成されたのには、定住の経路依存性とともに、支援システムのなかでのエスニック・ネットワークの存在の重要性があったことがわかった。また、こうした支援体制の延長線上に拡大していったコミュニティ形成が、元々は必ずしも難民の側からの強い要望によって発せられたものではなく、政府側から支援体制の効率化を目指して考案され、実施されるなかで起こったということはアメリカ社会の構造の特徴でもあるといえる。

つぎに、Southeast Asian Archives が収集しているベトナム難民に対するインタビューについても調査分析を進めた。多くのインタビューを調査するなかで、彼らの体験の多様性や本国との関係の多様性は、戦争体験の有無や家族の離散状況などさまざまな要因が絡み合っていることが明らかになった。さらに、アメリカへの移動によって、アメリカ社会における再定住過程での彼らの体験が彼らの難民としての記憶形成に大きく影響を与えていることがわかった。本研究の成果としては、とくにベトナム戦争後の再教育キャンプ経験が記憶の共同体を作り出し、そこでの「裏切り者」と見なされた人が強制送還されるべきだという動きが生まれた事例を取り上げ、在米ベトナム人コミュニティでの強制送還がベトナム系アメリカ人コミュニティ形成を強化するものとして機能してきたことを分析し、論文として出版した。

2019年には、カリフォルニア大学アーバイン校のグローバルスタディーズ科の Long Bui 准教授とも面談し、ベトナム難民の体験およびその記憶について意見交換を行い、インドシナ難民のグループにおいては、現在カンボジア難民の体験が大きく注目されているということも学んだ。そして、カリフォルニア大学サンディエゴ校 Yen Le Espiritu 教授とも面談し、最近の Critical Refugee Studies の動向についても知見を得た。また、同年 11 月に上智大学で開催された、シンポジウム「難民が開く日本社会」において報告の機会があったことで、日本におけるインドシナ難民の人びとの体験やその語りにも触れる機会を得た。彼らの体験とアメリカにおける難民の体験を比較研究することなどの着想を得たため、今後の研究活動に活かしていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Long Bui and Ayako Sahara	4. 巻 Vol. 28: No. 2
2. 論文標題 Creative Citizen Peacebuilding: Japanese Artists and Audiences Respond to the Vietnam-American War	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Peace and Conflict Studies Journal	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Ayako Sahara	4. 巻 31
2. 論文標題 Sharing the Travail of Reeducation Camps, Expelling the Betrayer: The Politics of Deportation in a Vietnamese American Community	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Japanese Journal of American Studies	6. 最初と最後の頁 111-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐原彩子	4. 巻 30巻1号
2. 論文標題 「人道」から「セキュリティ」へー対テロ戦争時代の難民排斥ー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 39-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00003138	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 4件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐原彩子
2. 発表標題 難民収容レジームの起源
3. 学会等名 日本アメリカ学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐原彩子
2. 発表標題 冷戦人道主義の逆説
3. 学会等名 シンポジウム「難民が開く日本社会 - インドシナ難民の受入れから40年を経て - 」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ayako Sahara
2. 発表標題 Criminalization of Foreign Bodies in Japan
3. 学会等名 The Migration Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐原彩子
2. 発表標題 共感による難民受け入れの限界－国際救済委員会（IRC）の活動を中心に
3. 学会等名 日本アメリカ史学会第15回（通算43回）年次大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐原彩子
2. 発表標題 ベトナム難民に対する強制送還：人道的救済の変容と強制送還レジームの拡大
3. 学会等名 中央大学人文科学研究所（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 佐原彩子、樋口映美 編、佐藤勘治、ジャーマ・A・ジャクソン、ヴェラ・セセルスキ、青木 利夫、高橋和雅、ヘザー・A・ウィリアムズ、佐々木孝弘、永島剛、兼子歩、土屋和代、大串潤児	4. 発行年 2020年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 228
3. 書名 歴史のなかの人びと	

1. 著者名 佐原彩子、青野利彦 編著、倉科一希 編著、宮田伊知郎 編著、豊田真穂、水本義彦、上英明、兼子歩、吉留公太、西山隆行、森聡	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 396
3. 書名 現代アメリカ政治外交史 「アメリカの世紀」から「アメリカ第一主義」まで	

1. 著者名 佐原彩子、蘭信三 編著、川喜田敦子 編著、松浦雄介編著、山本めゆ、吉川元、坂田勝彦、野入直美、崔徳孝、西脇靖洋、李淵植、中山大将	4. 発行年 2019年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 352
3. 書名 引揚・追放・残留 戦後国際民族移動の比較研究	

1. 著者名 佐原彩子、滝澤三郎編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 合同出版	5. 総ページ数 144
3. 書名 『世界の難民をたすける30の方法』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------